

## SF映画を科学する

第2回 『エイリアン』『エイリアン2』

松原仁 (人工知能研究者) × 池上高志 (人工生命研究者)

©Supplied by Capital Pictures/amanaimages



一九七九年に公開されたリドリー・スコットの映画『エイリアン』は、閉鎖された宇宙船の中で不気味な未知の生物と死闘する恐怖を描いたSFホラーの古典的傑作だ。その続編としてジエームズ・

リを得られるのだと語る。映画を通して描かれた未知なる生命と宇宙への畏怖は、二人の研究者にどのような科学的啓示を与えたのだろうか？

## 人工知能と人工生命の差異

キヤメロンを監督に迎えて製作された『エイリアン2』(一九八六年)は、前作とは一変して繁殖したエイリアンの群れと軍隊との戦いを描くアクション映画として高い評価を得た。『エイリアン』シリーズは人工生命研究者の池上高志が最も好きなSF映画の一つで、エイリアンをデザインしたH・R・ギーガーの美術館にまで足を延ばしたほどだという。一方で人工知能研究者の松原仁は、シリーズの一作目と二作目を対比することで、一九八〇年代当時の人工知能観や人工生命観を知る手がか

たという。『エイリアン』シリーズは、ホラー&アクションエンターテインメントであると同時に、生命や知能のあり方について洞察を促す映画でもある。人工生命研究者の池上もまた、生存本能に忠実なエイリアンの描写に魅力を感じ、このシリーズの虜(もよほ)になったという。

それほどに、H・R・ギーガーがデザインしたエイリアンは衝撃だったんです。

池上 『エイリアン』を初めて観たのは劇場公開当

そんなわけで、この連載の第一回で取り上げた『2001年宇宙の旅』とは違った意味で、宇宙へのイメージを膨らませてくれたのが『エイリアン』という作品でした。観客が予測しない新しいことが次々と起きる映画でしたから。

をアッシュが受けていたことがわかります。そのときリプリーは、言い逃れができないことを悟って襲いかかってきたアッシュと格闘になり、助けに来たパーカーとランバートがやつつけるのですが、倒したアッシュの首だけを接続してしゃべらせると、「まだあいつのことがわからないようだ」とか「(彼らは)純粹なんだよ」みたいなことを言われてしまう。しかも、「君たちに生き残るチャンスはないが、同情するよ」とか、そんなようなことを言うじゃないですか。このあたりのシーンでの人工知能やアンドロイドの描かれ方が僕は好きなんです。リドリー・スコットという人は細部を徹底的に作り込むし、彼のもっている宇宙観や異質なものに対する造形のイメージはすばらしいと思います。

松原 エイリアンの登場シーンも斬新でしたよね。

池上 ええ。主人公のリプリーたちが乗っている宇宙船が救難信号を受信し、ある惑星に向かうんですよ。そしてたどり着いた惑星で、乗組員のケインの顔に突如取りついた「フェイスハガー」によってエイリアンが体内に寄生する……というものでした。あのフェイスハガーのデザインもすばらしいですね。生存に必要な最低限の酸素は供給しつつ、尻尾で首を絞めてケインを昏睡状態にしているわけですから。

それから、作中での人工知能やアンドロイドの描かれ方も印象的でした。一作目の『エイリアン』では、頼りにしていた科学技術班のアッシュがアンドロイドだということが途中でわかるという設定になっています。船内にエイリアンが入り込んだ状態にもかかわらず、アッシュがエイリアンに対して積極的な対応をしないことをいぶかしく思ったリプリーがノストロモ号のメインフレームAIである「マザー」に理由を問う。すると、乗組員の命を犠牲にしても生きているエイリアンを回収する密命

松原 僕がこの作品を観たのは池上さんと同じく一九七九年の公開時で、まだ大学三年生でした。東大駒場の教養課程を終えて本郷の情報系の研究室に入り、人工知能を研究しようと思ってはいましたが、当時は「人工知能って何？」という人が大半の冷やかな時代でしたね。

人工知能と人工生命という視点から『エイリアン』を見てみると、面白いことに気づかされます。たとえば、生命体としてのエイリアンのすごさは、生命の目的である「遺伝子を残して生き続ける」ということに特化している点ですよね。これはある意味、人工生命研究の目指すところでもあるわけです。一方で、自発的ではなく偶然かもしれないけど、人

松原 ストーリーのメインテーマではないと思うけど、『エイリアン』と『エイリアン2』でのアンドロイドや人工知能の扱われ方は、その後のSF映画

間は知能を高度にしていくことで生き延びてきました。こちらは人工知能的なアプローチです。ですから、この作品で描かれるエイリアンと人類の対比は、人工生命研究と人工知能研究の考え方の差をかなりの確に表していると思うのです。当時は人工生命という言葉はなかったと思いますし、人工知能も今ほど深く理解されていたわけではない。それにリドリー・スコットも、どれだけ意識的にその部分を描いたのかは定かではありませんけどね。

池上 『エイリアン』と『エイリアン2』ではアンドロイドの立ち位置が少し変わりますよね。一作目は見分けがつかないまま、人間たちに紛れ込む形でアンドロイドのアッシュが登場していますが、『エイリアン2』に出てくるアンドロイドのビショップは最初からその正体が明かされています。しかも、前作でノストロモ号でのアッシュによる裏切りを経験しているリプリーは、『エイリアン2』の冒頭でビショップに対し不信感を抱いているわけです。

松原 「アンドロイドは信用できない、また裏切るに違いない」という不信感から始まっているのが、『エイリアン2』ですものね。

池上 ええ。でも『エイリアン2』の最後、ビショップは危険を冒しながらもリプリーを助けました。

『マザー』に理由を問う。すると、乗組員の命を犠牲にしても生きているエイリアンを回収する密命

松原 ストーリーのメインテーマではないと思うけど、『エイリアン』と『エイリアン2』でのアンドロイドや人工知能の扱われ方は、その後のSF映画